

苗木城の石垣

苗木城跡の最大の特徴は、自然の花崗岩を巧みに利用した石垣である。大矢倉などでは、石垣が自然の岩に寄り添っている。異なるさまざまな場所で、城の歴史を通じて使用されたさまざまな石垣技術の例を見ることができる。大きな岩に刻まれた柱穴やくぼみは、門や櫓の支柱が凹凸のある表面にどのようにしてしっかりとハマり、支えるように作られたかを示している。

大きな石垣は、安土桃山時代（1573-1600）以降、日本の城の一般的な特徴となっている。それまでは、土塁と堀を持つ木造の城郭がほとんどだった。

城の周囲には、時代ごとに築かれた4種類の石垣が見られる。

野面積（山積みの石垣）

大小さまざまな自然石を積み上げ、緩やかな直線勾配をつけた石垣。戦国時代、武将を中心とした群雄割拠の時代によく用いられた。洗練された見た目ではないが、この種の石垣は耐久性に優れている。綿蔵門や玄関口門跡で見ることができる。

打込（大まかな石垣）

二番目の石垣は、大石と小石の隙間を埋めるように積み上げたものである。曲線的な上り勾配で、頂上付近から徐々に急勾配になっている。北門や大矢倉にその例がある。

切込（きめこまかな石垣）

三つめは、石をノミで細かく削って平滑に仕上げた石垣である。隙間なくきれいに石垣が仕上がる。江戸時代中期によく見られた技法で、大矢倉や天守閣がその代表例である。

谷積（斜めに積み上げた石垣）

四つめは、荒削りの平石を斜めに組んでV字形にし、このV字に次の石列をはめ込んでいく方法である。これは、昭和（1926～1989年）までは道路建設にも使われたポピュラーな技法だった。このような石垣は、足軽長屋の近くや二の丸への道筋で見ることができる。